

平成29年度 独創的研究助成費 実績報告書

平成30年3月30日

報告者	学科名	看護学科	職名	准教授	氏名	井上 幸子
研究課題	幼少期の困難な出来事の体験とメンタルヘルス不調の関連性及びレジリエンスの影響評価					
研究組織	氏名	所属・職		専門分野	役割分担	
	代表	井上幸子	保健福祉学部准教授	精神看護学	総括、連絡調整、実施	
	分担者					
研究実績の概要	<p>本研究は、学術交流協定を締結している香港理工大学の研究者2名の研究グループと共同で実施しているものである。本報告書では、この共同研究のうち、申請者が担当した日本での調査に関するものについて記載する。</p> <p>本研究の目的は、幼少期に困難な出来事を体験したかどうかメンタルヘルス疾患の有病状況に関連があるかどうかについて検証することである。そして、青年期初期に発症する重要なメンタルヘルス疾患への影響について考察し、今後の支援につなげることを目的に実施した。調査では、レジリエンスと呼ばれる逆境に対してしなやかに耐え忍ぶ力・回復力についても情報収集し、レジリエンスが幼少期の出来事の体験とメンタルヘルス疾患の有病に対してどのような影響があるかについて検証することも本研究の目的である。日本、香港、イギリス、タイでの4カ国の調査結果を国際比較することを目的とした。国別の調査結果および国際比較結果について現在データを分析中である。</p>					

※ 次ページに続く

研究実績
の概要

研究方法

香港の研究者により開発されたレジリエンスについて尋ねる質問 (Resilience in the face of childhood adversity)、適応障害について尋ねる質問 (Adjustment Disorder)、ICD-10に沿って作成されたトラウマについての質問、基本属性についての質問は、すべて英語版で作成されていたため、日本語版を作成するためにまず研究者が翻訳しバックトランスレーションにより意味の正確性を確認した。Connor Davidsonにより開発されたレジリエンス尺度 (Connor-Davidson Resilience Scale 2) は、日本語版として利用されているものが既にあるため、開発者に了承を得た上で日本語版を使用した。オンラインで調査するため、香港理工大学の所有しているプラットフォームを使用し、調査票を作成した。倫理的配慮については、事前に岡山県立大学倫理委員会に諮問し承認を得た上で実施した。オンラインの質問紙にアクセスする前に、研究の説明文が表示され、同意した場合のみ回答可能なようにした。日本国内での対象者は大学生とし、分析が可能な対象者数で他国と大差ない人数とするため、各国約300名のデータを収集した。日本の調査は、大学生に対して、研究者が説明文書を手渡しし研究について説明をしたうえで、QRコードを読み取り自身のスマートフォンからオンラインで調査用紙にアクセスする方法とした。2017年10月から2018年1月末までの期間に実施し、約300名から回答があった時点でデータ収集を終了した。

結果

回答者の男女比は男性30%、女性70%と女性が多かった。現在、国際比較のため香港理工大学にてデータを分析中であり、日本での予備的解析結果のみ以下に示す。

Category by Frequency <i>*With adjustment</i>	Japan (n=314)	Category by Frequency <i>*With adjustment</i>	Japan (n=314)
<i>Physical abuse*</i>	16.5%	Incarceration household	2.0%
Emotional abuse	9.1%	Mental illness household	10.6%
Sexual abuse	6.3%	Divorced parents	20.9%
<i>Emotional neglect*</i>	13.8%	Violence household	15.4%
Physical neglect	1.6%	Bullying	3.9%
Substance abuse household	2.0%	Community violence	4.7%
		Collective violence	1.6%

成果資料目録

なし